第３章　実践編

１　言語障がいのある児童生徒への指導

２　自閉症のある児童生徒への指導

３　難聴のある児童生徒への指導

４　LD のある児童生徒への指導

５　ＡＤＨＤのある児童生徒への指導

６　その他障がいのある児童生徒への指導

1　言語障がいのある児童生徒への指導

（１）障がいの理解と指導内容

言語障がいとは、発音が不明瞭であったり、話し言葉のリズムがスムーズでなかったりするため、話し言葉によるコミュニケーションが円滑に進まない状況であること、また、そのため本人が引け目を感じるなど社会生活上不都合な状態であることをいいます。

通級による指導では、口蓋裂※１、構音器官（舌、唇、下あご、軟口蓋等）のまひなどの器質的及び機能的な構音障がい※２がある、吃音等話し言葉におけるリズムの障がいがある、話す、聞く等の言語機能の基礎的事項に発達の遅れがあるなど、通常の学級での学習におおむね参加できるものの、一部特別な指導を必要とする児童生徒が対象となります。

■通級による指導での指導内容（例）
- ○　正しい音の認知や模倣、構音器官の運動の調整、発音・発語の指導など構音の改善にかかわる指導
- ○　遊びの指導・劇指導・斉読法※３による話し言葉の流ちょう性を改善する指導
- ○　遊びや日常生活と体験を結びつけた言語機能の基礎的事項に関する指導
- ○　話すことの意欲を高める指導、カウンセリング等の指導

言語障がいによる困難の改善・克服のためには、学校における特別な指導の下に、生活場面で継続的に発音・発語の練習を行う必要があり、在籍学級の担任や家庭と連携を密接に図ることが大切です。

（２）通級指導教室の環境

言語障がいにより通級による指導を受ける児童生徒は、多様な学年にわたり、また、自校からの通級もあれば他校からの通級もあるなど様々です。このように多様な実態があることから、児童生徒が気持ちよく通級することができるように、教室の展示物を整えたり、ゲーム等の遊具を用意したりするとよいでしょう。

また、前述したとおり家庭での保護者等とのかかわりが、障がいによる困難の改善・克服に重要な役割を担っていることから、指導に対する理解や適切な関わりを促すためにも、保護者が参観できたり、担当者と会話を交わしたりできる環境づくりも必要です。

通常の学級では、教室の雰囲気を話しやすいものにすること、級友の理解を得られる学級にすること、話すこと・読むことについて自信が持てるような指導を行うこと等に留意することが大切です。

※１　胎生初期に口蓋部分の形成が何らかの理由で完了しなかったため、生下時に口蓋が完全に、あるいは部分的に形成されずに割れている状態。
※２　話し言葉を使う中で、「さかな」を「たかな」、「はなび」を「あなび」等と一定の音を習慣的に誤って発音する状態。
※３　一緒に音読をすることで音読への不安を取り除く方法。

（３）指導の実際（実践事例）

①　実態把握と目標の設定

◆プロフィール

対象児童生徒	小学校２年生	主たる障がい	言語障がい

◆実態把握

実　　態	○　「か」行音が「は」行音に置換し、全体的に鼻音化している。 ○　先天的な病気のため乳児期に手術を受け虚弱体質もあって、身体のバランスがとりにくく、ころびやすい。生後７ヶ月より療育機関でリハビリ治療を受けている。口腔機関の筋力も弱く、長く息を吐くことが難しく、うがいができない。 ○　学習面の遅れはなく、何事にも積極的に取り組む。 ○　負けん気が強く、修正されることは苦手である。
本人の思い	正しい発音で話せるようになりたい。
保護者の思い	みんなと一緒に学校で楽しく過ごすことができるようになってほしい。

◆指導目標の設定

通級による指導で指導すべき目標	呼気が鼻に抜けないように、明瞭に発音することができる。

◆指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
自立活動の内容		・障がいによる困難を改善・克服する意欲			・日常生活に必要な基本動作	・言語の受容と表出

◆具体的な指導内容の設定

具体的な指導内容	○　ピンポン玉やスポンジ玉などを吹く遊びを取り入れ、楽しく口腔内圧の調整力を高める。 ○　うがいができるようにスモールステップで練習をして、軟口蓋閉鎖機能の能力を高める。 ○　正しい構音要領を知らせ、口や舌の位置を確認しながら発音練習をさせる。（鏡で確認） ○　自分の身体や発音の状態など自分のよさや苦手さを理解した上で、自分の身体の声を聞きつつ、前向きにトレーニングに取り組もうとする気持ちを育てる。

②　通級による指導での授業実践例

ア　単元名　「か」音のつくりかた

イ　目　標　呼気の出し方や舌の位置に気をつけて、「ｋ」音の音づくりができる。

ウ　展　開

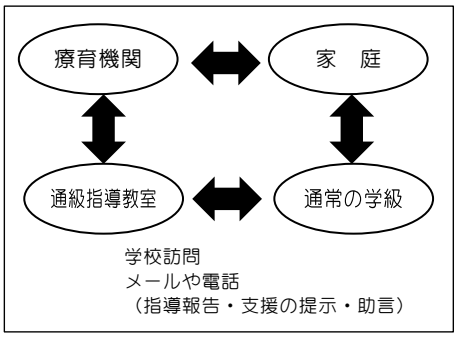
学習活動	教師の支援（○）と評価（◎）
1　あいさつをして、本時のめあてと学習の流れを確認する。 2　口の体操をする。 ・強い息、弱い息 ・舌遊び 	○　あいさつシートを見本にして話をさせることで、本児の声や心理状態を確認する。 ○　ボール吹きの遊びにより、呼気を調整して吐く力を高める。また健口体操をすることで、口腔周辺筋の力や舌の柔軟化の促進を図る。 【ポイント①】 基礎的なトレーニングに遊びを取り入れることで、楽しく活動することができる。 （あっちむいてホイ、じゃんけん）
3「ｋ」音づくりをする。 ・やさしいうがい ・鼻をつまんで「ン、g」音から「ｋ」音へ 	○　口の中に水を少しずつ含み横臥することで、奥舌が軟口蓋に接触する感触をつかませる。水の量の調整をしながら、がらがらうがいもできるように導いていく。 ○　鼻に抜ける「ン、ｇ」を、鼻をつまんで音を出すことで、無声音「ｋ」の感覚を確かめさせる。 【ポイント②】 誤り音を修正するのではなく、新しい音をつくるという意識に変えることで、前向きに練習に取り組むようになる。
4　振り返りと今日のおたのしみをする。	○　課題の達成度と本時のがんばりについて、担当者と保護者からのコメントを聞かせ、次時への意欲付けを図る。 ◎　「ｋ」音の音づくりの方法を学ぶことができたか。 ○　好きな遊びを選び、保護者（授業参観による）も誘って楽しく活動させ、次時への意欲を高める。

③　在籍学級（学校）等との連携

ア　通級による指導担当教員と在籍学級担任者等間の情報の共有

在籍学級担任と情報共有するために、「在籍校訪問」を５月中旬の時期に実施し、児童のよさや困っていることと保護者の思いや願いを伝えている。学級担任から見た児童の姿と擦り合わせながら、児童を捉える視点を合わせ、個別の指導計画を作成している。早期の療育指導担当者の授業見学も実施し、幼児期からの成長を確認し合った。

日々の通級指導教室での指導状況は、指導後のメールで随時在籍学級担任に報告している。



【情報の共有】

イ　在籍学級等での指導の実際

在籍学級担任と学習内容を共有し、通級による指導で学習したことを通常の学級の中でも取り上げて、発表する機会を設定した。ビジョントレーニング※４を兼ねた九九探しゲームを紹介するという課題である。ゲームの方法をみんなに分かりやすく伝えるために、苦手な発音の練習に励むきっかけづくりとなった。また、集団の中で活躍できることで、自己肯定感を高めることにもつながった。

【在籍学級での紹介】

④　評価（成果と課題、改善）

本児の発音については、呼気が鼻に流出する量が減り、唇や舌を意識して発声することで、全体的な発音の明瞭度が高まった。また、上を向いてうがいができるようになり、鼻に抜けない「が」音が正しく発音できるようになった。うがいも「がらがら」から「からから」へと「か」音に近づくようにもなってきた。「か」行音については、器質的な軟口蓋の動きの問題ではなく悪習慣によるものではないかと思われるので、癖が治れば改善につながると期待し、今後、「が」行音を無声音化すること（ささやき声での「が」音の練習）で、さらに正しく発音ができるように練習をしている。語頭音では発音しにくいが、語中音や語尾音の場合、鼻音化が少なくなってきている。

発音の練習は、児童にとって単調で改善が視覚的に見えにくいため、意欲が持続しにくい。根気強く自分と向き合う時間も必要であるが、周囲の励ましが原動力となる。通常の学級の担任と指導内容について共有し、学級の中で活躍する場を設けられたことが、本児の大きな力となったのではないかと考える。

通常の学級の中で学校生活が送れるだろうかと心配していた保護者は、堂々と発表する子どもの姿に感激し、学級担任や友達への感謝の思いを述べていた。

※４　板書をノートにとることが苦手、本を読むとき文字や行を読み飛ばしてしまう、漢字がなかなか覚えられないなどの困難さに対し、眼球運動や視覚と体の動きを連動させるなど、「見る力」を高めることで改善・克服しようとするアプローチ法のこと。

２　自閉症のある児童生徒への指導

（１）障がいの理解と指導内容

自閉症とは、３歳程度までに現れることが多く、①他者との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味・関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする発達の障がいです。

通級による指導では、自閉症又はそれに類するもので、他者と社会的な関係を形成することに困難を伴い、しばしばコミュニケーションの問題や行動上の問題、学習能力のアンバランスを併せ有するなど、通常の学級における授業におおむね参加できるものの、一斉の指導だけでは十分な成果を上げることが難しい児童生徒が対象となります。

■通級による指導での指導内容（例）
- ○　円滑なコミュニケーションのための知識・技能を身に付ける指導
- ○　学校の決まりや適切な対人関係を維持するための社会的ルールを理解するなどの社会的適応に関する指導

指導に当たっては、個別指導で学んだ知識・技能を一般化する場面として、グループ指導を行うことも効果的です。また、絵カードや写真、視聴覚機器等の教材・教具を有効に活用し、指導の効果を高めることが大切です。

（２）通級指導教室の環境

自閉症の障がい特性を考慮すると、外部からの音や視覚的な刺激が遮断される個別指導用の部屋（用意が難しい場合は、衝立や棚、ロッカーなどで仕切ったブースなど）が必要な場合があります。その際、注視・追視・傾聴しやすいよう配色や掲示、備品の配置などに留意することが大切です。

また、個別指導以外に、小集団による指導が可能なスペースやプレイルーム等が必要になります。また、パニックを起こした児童生徒が落ち着く場所として、小スペースがあると、カームダウン（クールダウン）エリア※1として利用することができます。こうした環境については、児童生徒の年齢及び指導の時期や指導内容などを考慮し、児童生徒の状態に応じて柔軟に対応することが重要です。

通常の学級では、当該児童生徒への指導・支援の外に、在籍学級等の児童生徒に対して、障がい特性を理解してもらうよう努めたり、友達関係を調整したりすることも重要です。

※１　カームダウンとは、心を落ち着かせること。カームダウンエリアとは，感情的になったとき冷静になるための場所のこと。例えば、個別の仕切りを設置して、音や視覚的情報を減らしたり、気持ちが落ち着くよう本人のお気に入りのものを置いたりする。

（３）指導の実際（実践事例）

①　実態把握と目標の設定

◆プロフィール

対象児童生徒	中学校３年生	主たる障がい	自閉症

◆実態把握

実　　態	○　自分の考えを相手が理解できるように説明することは難しい。 ○　人とコミュニケーションをとることが苦手で、相手の気持ちを想像して言葉を選択したり、場の雰囲気を読み取ったりすることが難しい。 ○　基本的な生活習慣は身に付いている。まじめな性格で、臆することなく友人に注意することができる。マイペースで機敏に動くのは苦手で、おどおどした様子も見られる。 ○　数学が苦手で、負の数や文字式の計算は難しい。また、読み書きは間違いが多い。 ○　ゲームをしたり、動画配信サイトを見たりするのが好きである。
本人の思い	コミュニケーションが上手に取れるようになりたい。また、高等学校に進学できるように基礎学力を身に付けたい。
保護者の思い	場の雰囲気を読み取る、会話が上手にできるなど、コミュニケーションの能力を高めてほしい。また、授業にもついていけるようになってほしい。

◆指導目標の設定

通級による指導で指導すべき目標	○　場面に応じて、適切な会話ができる。 ○　相手の気持ちを考えながら、自分の考えを相手に伝えることができる。

◆指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
自立活動の内容		・情緒の安定 ・障がいによる困難を改善・克服する意欲	・他者とのかかわりの基礎 ・他者の意図や感情の理解 ・集団への参加の基礎			・コミュニケーションの基礎的能力 ・状況に応じたコミュニケーション

◆具体的な指導内容の設定

具体的な指導内容	〈１学期指導目標及び指導内容〉 場面に応じて、適切な会話ができる。 ○　生活の中で実際にあった場面を取り上げ、適切な応対の仕方を考えさせる。 ○　適切な応対の仕方を考えさせるため、具体的な場面を想定したソーシャルスキルトレーニング※２（以下、「ＳＳＴ」という。）を行う。 〈２学期指導目標及び指導内容〉 相手の気持ちを考えながら、自分の気持ちを適切に相手に伝えることができる。 ○　生活の中で実際にあった出来事を取り上げ、相手の気持ちや適切な応対の仕方を考えさせる。 ○　適切な応対の仕方を考えさせるため、様々な場面を想定したＳＳＴを行う。

※２　ソーシャルスキルとは、対人関係や集団行動を上手に営んでいくための技能（スキル）のこと。対人場面において、相手に適切に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動のことで、その対人行動を習得する練習のことを「ソーシャルスキルトレーニング」という。

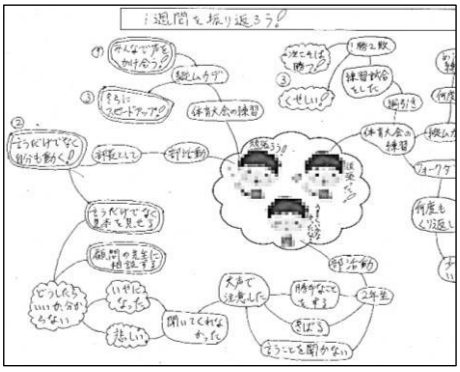
②　通級による指導での授業実践例

ア　単元名　「上手な断り方を身に付けよう」

イ　目　標　断り方によって相手の受け取る印象が変わることを知り、よりよい伝え方を身に付けることができる。

ウ　展　開

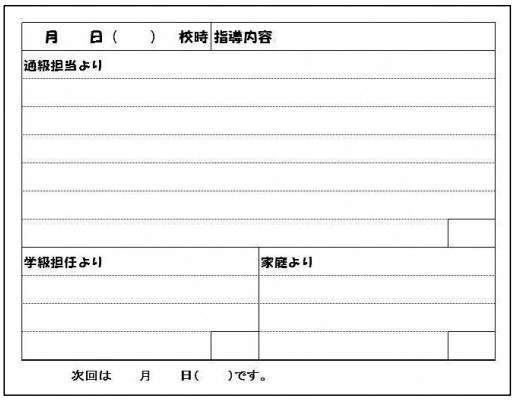
【ポイント①】
一つの活動は長すぎないようにし、生徒の状態に合った活動を幾つか組み合わせて授業を構成することで、集中力を持続させて取り組ませることができる。

学習活動	教師の支援（○）と評価（◎）
1　本時の学習内容を確認する。 ・本時の活動の内容と流れを知る。 2　生活の振り返りを行う。 ・前回の通級から今日までの、学校生活や家庭生活を振り返る。  【イメージマップ】	○　学習への意欲と見通しが持てるよう活動の流れを提示する。 ○　会話を通して、上手なコミュニケーションのとり方を体験させる。 ○　自分の気持ちが整理できるよう、会話の中で選択肢を提示したり、イメージマップを用いたりする。 【ポイント②】 会話の時間をとることで、生徒の生活の様子や困っていること、課題を把握することができる。また、指導者との人間関係が円滑になり、指導がより効果的になる。 ○　生活の中に課題が見られるようであれば、取り上げて適切な行動について考えさせる。 ◎　自分の気持ちを伝えることができたか。
3　生徒の状態に応じた学習を行う。 ・活動①「よく見て覚えよう」 見る力を高めるための、ビジョントレーニングを行う。 ＊学習内容「図形の記憶」 ・活動②「考えてみよう」 対人関係構築のスキルを高めるためのＳＳＴを行う。 ＊学習内容「上手な伝え方」	○　短時間で集中して取り組むことができるよう、ＩＣＴ機器を使用する。 ◎　最後まで集中して取り組めたか。 ○　具体的な場面で、どのように行動すればよいかを考えることができるよう、場面カードを提示する。 ○　実際の場面を想定したロールプレイを行う。 ◎　どう行動するのがよいか、理解することができたか。 【ポイント③】 自分で考え、さらにロールプレイで体験することで、実生活に生かしやすくなる。
4　生徒の要望に応じた学習を行う。 ・生徒の要望に柔軟に対応した学習を行う。 ＊学習内容「面接の練習」	○　学校生活での不安を軽減し、自信を持つことができるよう、生徒の要望に応じた学習を行う。 ◎　学校生活への意欲を高めることができたか。
5　次時の学習予定を伝える。 ・次時の活動への意欲を高める。	○　学習の見通しが立つよう、次時の予定を伝える。

③　在籍学級（学校）等との連携

ア　通級による指導担当教員と在籍学級担任者等間の情報の共有

通級による指導担当教員と在籍学級担任者、保護者とは、基本的に毎回、連絡ファイルを用いて情報の共有を行っている。通級による指導担当教員からは授業内容や授業での生徒の様子を記入して、学級担任（必要に応じて教科担任）と保護者に伝えるようにしている。学級担任と保護者からは学校や家庭の様子を記入してもらい、通級での授業に生かすようにしている。また、保護者と直接連絡を取りたい場合は、通級指導教室用に開設したフリーメールを使用して連絡するようにしている。


月　日（　）　校時 指導内容
通級担当より
学級担任より
家庭より
次回は　月　日（　）です。

【連絡ファイル】

このように学級担任や保護者と連絡を密にして情報を共有することは、生徒の学校や家庭での様子を知り、生徒の状態に応じた授業を行うのに大変有効であるため、継続して行っていく必要がある。

イ　在籍学級等での指導の実際

通級による指導において、教科の新しい単元に入る前に振り仮名を打って読む練習をするなど、在籍学級での授業の事前の準備、練習を行うことで、初めて行うことへの不安の軽減を図っている。これにより、在籍学級では、生徒の「失敗したらどうしよう」という不安が軽減され、授業に落ち着いた態度で取り組むことができるようになった。

また、授業後に学級担任や教科担任から生徒の様子を聞き、課題があれば通級による指導で対応している。

④　評価（成果と課題、改善）

〈１学期の評価〉

実際に起きたトラブル（部活動での後輩に対する注意の仕方等）を取り上げて考えさせたことで、具体的な場面における適切な応対の仕方を学ばせることができた。また、部活動に関しては、後輩とのトラブルを減らすことができた。相手の気持ちをよく考えて話をするということは苦手であるため、今後、実際の生活の場面を想定したＳＳＴを数多く行う。

〈２学期の評価〉

友達とのトラブルはほとんど見られなくなり、落ち着いた学校生活を送ることができるようになってきた。また、学校生活が安定することで、入試に向けて学習に集中して取り組むことができるようになってきた。他者とのトラブルは見られなくなったが、自分の気持ちを表現するのは、やはり苦手である。また、入試が近づくにつれて、学習面や面接試験の不安感が大きくなってきた。引き続き、ＳＳＴを行うとともに、面接練習を取り入れるなど、入試に対する不安感を取り除くための指導を行う。

３　難聴のある児童生徒への指導

（１）障がいの理解と指導内容

通級による指導では、補聴器等の使用によっても通常の会話における聞き取りが部分的にできにくいなど、通常の学級での学習におおむね参加できるものの、一部特別な指導を必要とする児童生徒が対象となり、指導においては、保有する聴力の活用が優先されます。

障がいの程度の判断に当たっては、専門医による聴覚障がいに関する診断結果に基づき、難聴となった時期を含め生育歴、言語発達の状況等を考慮して、総合的に行うよう留意することが必要になります。

■通級による指導での指導内容（例）
- ○　補聴器等を適切に装用する指導
- ○　聴覚学習として聴く態度の育成、聞き取りの練習、音声の聴取及び弁別の指導
- ○　日常の話し言葉の指導、語彙拡充のための指導、言語概念の形成を図る指導、日記等の書き言葉の指導

指導に当たっては、当該児童生徒が難聴に対する自分なりの受け止め、周囲の人たちの思いなどについても理解を深めることにより、通常の学級における学習や生活を円滑に行うことができるようにするための援助や助言等も大切です。また、コンピュータや視聴覚機器等の教材・教具を有効に活用するような工夫も必要です。

（２）通級指導教室の環境

身近な音に興味をもち、それを聞き分けることができるようにするためには、様々な音が耳に入るような環境も必要ですが、一方では、集中して聞く態度を育てるために、余計な音が耳に入らないよう防音に留意した環境も必要です。例えば、二重窓にするなどして、ＣＤ等による聞き分けの指導が適切に行えるようにすることが大切です。

難聴の児童生徒は、唇の動きや表情の変化を的確に捉えて、会話の内容を類推する必要があることから、部屋の明るさにも留意する必要があります。

一般的には、個別指導が多いことから、会話や聞き取り、発音指導、各教科の内容を取り扱いながらの指導等が適切に行えるような教室環境が必要です。

通常の学級では、教室の座席配置や授業の際の教師の話し方などの工夫により、話し言葉によるコミュニケーションの円滑化を図ることが必要です。

（３）指導の実際（実践事例）

①　実態把握と目標の設定

◆プロフィール

対象児童生徒	小学校４年生	主たる障がい	難聴

◆実態把握

実　　態	中等度難聴があり、両耳に補聴器を装用している。授業中は、FM補聴システムを用いて学習している。 中学年になり、生活言語から学習言語への比重の高まりと、抽象的思考が必要な学習内容の増加で、国語の教材の読み取りが難しくなってきた。また、言語力の伸び悩みが、他教科の学習理解に影響し始めてきた。算数では、文章題を中心に苦手さが増してきている。読書へ抵抗を示すことが多く、大好きな「釣り」の図鑑を見ること以外は、読書の必要性は感じていても読書活動を好まない。 文章読解が難しくなってきており、日本語の力、特に読む力を身に付け、学級での様々な文章理解に自信を持って取り組めるようにしていく必要がある。
本人の思い	国語の文章読解や算数の文章題の読み取りができるようになりたい。
保護者の思い	言葉の力を身に付け、授業が分かるようにしてほしい。

◆指導目標の設定

通級による指導で指導すべき目標	読書力診断検査で、学年相応の読書力のレベルに到達する。

◆指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
自立活動の内容		・障がいによる困難を改善・克服する意欲		・保有する感覚の活用		・言語の受容と表出 ・言語の形成と活用

◆具体的な指導内容の設定

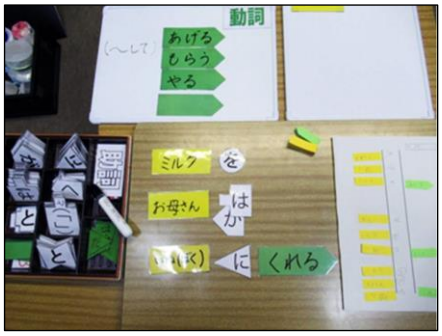
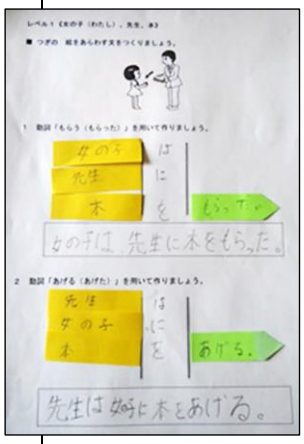
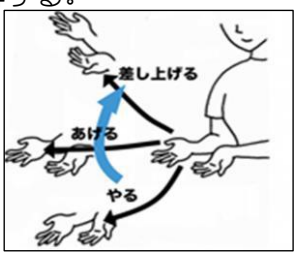
具体的な指導内容	日本語能力検査等を実施し、苦手な構文等を把握した。検査結果で苦手さのあった「受動文」「やりもらい文」「比較文」「格助詞」等について、実態に合わせた問題を作成して学習を実施した。また、構文検査の「助詞」ストラテジーを通過できる言語理解力を身に付けることを短期目標に、受動文、やりもらい文の学習を通して、日本語文法の構造や助詞のイメージ、敬語等にも触れられるように指導順序を計画した。 短い文章・物語を読み、行動や情景・心情理解につながる語彙の理解や、拡充する学習を行った。説明文の読解では、「全体－部分」「具体－抽象」等、文章の構成についての理解を促す学習を行った。 生活の中で読書の習慣付けを行うため、大好きな「釣り」の漫画や雑誌を中心に読むことを促した。新しい語彙を学習した際は、「釣り」に関連させた文章作りに取り組み、語彙の意味理解と定着を図るようにした。

②　通級による指導での授業実践例

ア　単元名　やりもらい文、とその敬語

イ　目　標　「あげる」「もらう」「くれる」の構文が理解でき正しく使える。

ウ　展　開

学習活動	教師の支援（○）評価（◎）
1　本時の学習内容を知る。 「あげる」「もらう」「くれる」を使って、イラストを文章化することを理解する。	○　絵カードのイラストを用いて、興味を引き付ける。 ◎　自由な口頭での作文で、普段使っている動詞が正しく使えたか。
2　プリントの問題を考える。 プリントの問題を、机上で品詞カードで操作して作文する。確認した後、プリントにまとめる。   	○　児童の作文を、品詞・助詞カードを用いて黒板に、分かりやすく構造化する。 ◎　間違えやすい「くれる」の動作主が誰かを理解できたか。 【ポイント①】 文法理解のために、日本語構文の視覚的表示を継続してきた。品詞カードや助詞カードを用いることで、黒板や主語と動詞と助詞の関係が見えやすくなるとともに、訂正や文法ルールの確認の際に視覚的な操作が可能になる。
3　「くれる」について考える。 「もらう」と「くれる」の手話が同じであることに気付く。 	○　動作「くれる」をしている動作主が格助詞「が」「は」に対応しているか、イラストや品詞・助詞カードで確かめる。 ◎　違う他の絵でも間違えずに作文できたか。 【ポイント②】 手話では同じ表現だが、動作主が違うことを理解させるようにする。手話表現と日本語の対応の置き換えで理解が進みやすくなる。
4　対応する敬語等を知る。 「やる」や「差し上げる」「いただく」「くださる」の敬語表現との対応を理解する。  	○　相手・立場・親密度によって、敬語表現が変わってくることを図にまとめて示す。 ◎　相手を、「校長先生」「王様」「友達」などに変えたときに正しく作文できたか。 【ポイント③】 手話の手の動きを「目下、対等、目上」の位置を変えて表現しながら、すらすらと言えるようになるまで、繰り返し練習させるようにする。
5　次回の学習について確認する。	

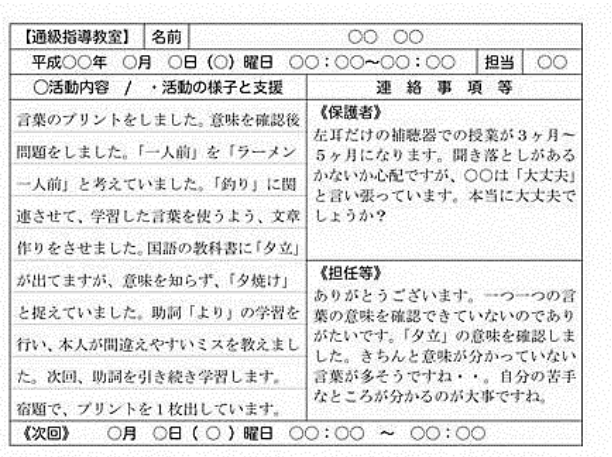
③　在籍学級（学校）等との連携

ア　通級による指導担当教員と在籍学級担任者等間の情報の共有

在籍校の学級担任とは、「通級指導ファイル」を作成して連絡を取り合った。通級による指導担当教員と学級担任者間だけでなく、家庭との連絡ノートとしても活用した。毎回の指導後、その時間に学習した内容や児童の様子についての連絡、保護者や学級担任からの質問への回答、家庭や学校でしてもらいたい指導やお願い事項について記入し持ち帰らせるようにした。

また、ファイルには指導で用いたプリント類などもとじて持ち帰らせるようにし、課題内容やつまずき、頑張りが確認できるようにした。

特別支援教育コーディネーターに指導の場面を参観してもらったり、情報保障を行う生活支援員や担任、特別支援教育コーディネーターと今後の支援について協議する機会を設定したりした。



【通級指導教室】	名前	○○　○○	
平成○○年　○月　○日（○）曜日　○○：○○～○○：○○			担当　○○
○活動内容　/　・活動の様子と支援		連　絡　事　項　等	
言葉のプリントをしました。意味を確認後問題をしました。「一人前」を「ラーメン一人前」と考えていました。「釣り」に関連させて、学習した言葉を使うよう、文章作りをさせました。国語の教科書に「夕立」が出てますが、意味を知らず、「夕焼け」と捉えていました。助詞「より」の学習を行い、本人が間違えやすいミスを教えました。次回、助詞を引き続き学習します。宿題で、プリントを１枚出しています。		《保護者》 左耳だけの補聴器での授業が３ヶ月～５ヶ月になります。聞き落としがあるかないか心配ですが、○○は「大丈夫」と言い張っています。本当に大丈夫でしょうか？ 《担任等》 ありがとうございます。一つ一つの言葉の意味を確認できていないのでありがたいです。「夕立」の意味を確認しました。きちんと意味が分かっていない言葉が多そうですね・・。自分の苦手なところが分かるのが大事ですね。	
《次回》　○月　○日（○）曜日　○○：○○　～　○○：○○			

【通級指導ファイルによる連絡】

イ　在籍学級等での指導の実際

学級担任とは、ファイルによる連絡を通して、苦手なところを頑張って取り組んでいる様子や児童が苦手としているところを共有することができた。また、補足プリントでの補充や、授業で苦手な音読練習を増やすなどの連携した関わりを行ってもらえた。さらに、ファイルで学校での様子を伝えてもらうことで指導のヒントを得ることもできた。

④　評価（成果と課題、改善）

各種検査を活用して、児童の苦手な課題を把握することで、目標を整理することができた。応用のための読解プリントは、児童の興味・関心に合わせた内容のものを作成したため、安心して取り組めていた。しかし、プリントで学習したスキルが、すぐに実際の読解力に結び付かないこともあり、個々の課題についての理解の向上は図れても、ゴールとなる目標には到達できにくいところがあった。毎回、課題を独自に作成して実施してきたが、目標と掛け離れた内容になっていることもあった。市販の教材を使用したり、参考にしたりしながら、語彙レベルを上げていく必要があると思われた。

通級による指導で行った読みや文法の指導方法は、在籍学級の担任が配慮のポイントを持って指導に当たることができ、大変有効であった。通級による指導を、在籍学級での支援や学びにつながるものにするためには、通級による指導担当教員が、在籍学級の授業を参観し助言するなどして、通常の学級で「普段使い」できる教材開発や支援につなげていくための研究や工夫を行う必要があった。

４　ＬＤのある児童生徒への指導

（１）障がいの理解と指導内容

ＬＤとは、学習に必要な基礎的な能力のうち、一つないし複数の特定の能力についてなかなか習得できなかったり、うまく発揮することができなかったりすることによって、学習上様々な困難に直面している状態をいいます。

全般的に知的発達に遅れはありませんが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と活用に著しい困難を示す状態で、一部特別な指導を必要とする児童生徒が、通級による指導の対象となります。

■通級による指導での指導内容（例）

〈聞くことに困難さがある場合〉

興味・関心のある題材等を活用して、できるだけ注意を持続させたり、音量に配慮したりして、注意深く話を聞かせる指導

〈話すことに困難さがある場合〉

あらかじめ、話したいことをメモしておくなどの工夫をして、書かれたものを見ながら自信をもって話をさせる指導

〈読むことに困難さがある場合〉

・漢字やアルファベットを大きく表して、細かな形の違いを見極めながら読む指導
・文字単位ではなく、まとまりである単語全体としてとらえさせる指導
・書かれた事実を正確にとらえさせる指導
・図解して主題や要点をとらえさせる指導

〈書くことに困難さがある場合〉

・間違えやすい漢字やアルファベットを例示するなどして、本人に意識させながら正確に書く指導
・経験を思い出しながらメモし、それを見ながら文章を書く指導
・読み手や目的を明確にして書く指導

〈計算することに困難さがある場合〉

・数概念を形成したり、数概念を確認しながら計算力を高めたりする指導
・筆算の際にマス目のあるノートを使うなど、桁をそろえさせる指導

〈推論することに困難さがある場合〉

・文章の内容を図示するなどして、その意味を理解させながら文章題を解く指導
・図形を弁別する指導、空間操作能力を育てる指導
・位置関係を理解させる指導等を通して、推論する力を育てる指導

（２）通級指導教室の環境

ＬＤに見られる困難さは、いくつかの要因が重なり合って起こることがあることに留意する必要があり、位置や空間を把握するためには、自分の体を大きく動かして学習する指導も効果的ですから、体を大きく動かすことのできる空間も確保しておく必要があります。

ＬＤのある児童生徒は、学習上の失敗を数多く経験して自信を失っていることもありますので、学習する場は、入口や窓から見えにくい場所や、外部からの視線を遮ることができるような場所にする配慮も考えられます。

（３）指導の実際（実践事例）

①　実態把握と目標の設定

◆プロフィール

対象児童生徒	小学校２年生	主たる障がい	ＬＤ（書く・計算する）

◆実態把握

実　　態	○　指先が不器用なため、細かい作業が苦手である。 ○　全体の指示が伝わりにくく、集団行動の際には言葉掛けを必要とする。 ○　学習したことが定着しない。 ○　言葉を介して人と関わるのが苦手である。 ○　新しい環境に慣れるまでに時間を要する。 ○　字形がとりにくく、漢字を覚えることが苦手である。
本人の思い	○　友達と仲よく過ごしたい。 ○　漢字を正しく書きたい。
保護者の思い	○　授業中に挙手をして発表してほしい。 ○　落ち着いて字を書いてほしい。 ○　初めてのことにもチャレンジしてほしい。

◆指導目標の設定

通級による指導で指導すべき目標	○　平仮名表記や字形に気を付けて、丁寧に書くことができる。 ○　足し算・引き算の筆算や九九などの計算ができる。

◆指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
自立活動の内容	・生活のリズムや生活習慣の形成				・作業に必要な動作と円滑な遂行	・言語の受容と表出 ・言語の形成と活用

◆具体的な指導内容の設定

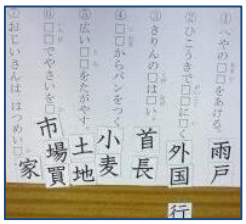
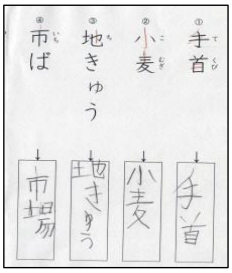
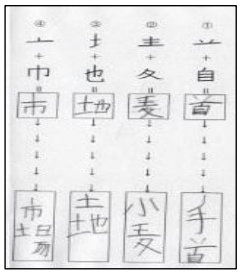
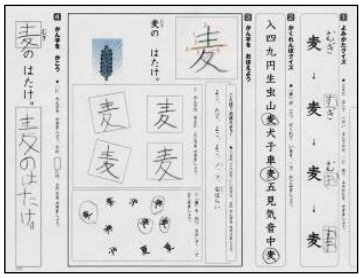
具体的な指導内容	〈１学期〉 ○　ビジョントレーニングや言葉の力を高めるための「ほっとサーキット」（複数の学習コーナー）のミニコースを作り、取り組ませる。 ○　漢字の練習では、なぞり書きで形を覚え、正しく書くことができるようにする。 ○　点つなぎ、特殊音節の表記、加減の筆算、時計の読み方、平仮名の練習など、自主学習ノート１ページを作成し、毎日の家庭学習として取り組ませる。 〈２学期〉 ○　「ほっとサーキット」に九九のコーナーを設け、九九の定着を図る。 ○　学級での漢字 10 問テストに向けて、目標点を決め、取り組ませる。毎日の自主学習ノートに漢字を練習させ、その成果をプレテストで確かめる。 ○　自主学習ノートは、１学期の内容に 30 マス九九を加え、家庭学習として取り組み、毎朝提出させる。

②　通級による指導での授業実践例

ア　単元名　「漢字を正しく書こう」

イ　目　標　細かい表記に気を付けて正しく漢字を書き、プレテストで 60 点以上とる。

ウ　展　開

学習活動	教師の支援
1　本時のめあてをつかむ。 ・本時の活動内容と流れが分かる。	○　活動への意欲と学習の見通しをもたせる。
2　「ほっとサーキット」を行う。 ・課題を４つ選んでスタートする。 【ナンバーズタッチ（３の段）】【折り紙で三角を作ろう】	○　教室にミニコースを作り、課題に取り組ませることで、巧緻性や見る力、ワーキングメモリー、言葉の力を高める。 【ポイント①】 毎時間実施することで、やり方に慣れ意欲的に取り組める。また、本児に合った課題を少しずつレベルアップできる。
3　漢字練習をする。  【漢字パズル（２ピース）】　【あてはめ漢字】   【たりないのはどこ】　【漢字の足し算】  【短時間で仕上がる漢字プリント】	○　次回の漢字テストから重点的に練習する漢字を相談しながら６つ選ばせる。 ○　カードを操作させたり、ワークシートを利用して正しい漢字を見つけさせたりした後、ホワイトボードに練習させ、表記上注意して書く箇所を伝える。 【ポイント②】 児童が作った漢字パズル（２ピース）を使用することで、楽しく活動できる。在籍学級でも利用することで、満足感が得られる。 【ポイント③】 熟語を作りやすいように、漢字パズルの裏に読み仮名を書いている。カードを操作することで、漢字への苦手意識を軽減することができる。 ○　毎日練習している自主学習ノートの漢字を点検し、マスの中に収められていたり、形に気を付けて書けていたりする文字に丸を付け、評価する。
4　プレテストを行う。 ・目標点を決めてから、実施する。	○　プレテストを実施する前に、気を付ける箇所を伝えておく。 ○　目標点に到達した際には大いに褒めるとともに、間違った漢字は正しく２回書かせることで、10 問テストに向けての気持ちを高める。
5　本時の振り返りをする。 ・１時間を振り返り、頑張ったことや次時の目標等を連絡ノートの感想欄に書く。	○　１時間を振り返り、頑張っていたことを称賛し、次時の予告をする。

③　在籍学級（学校）等との連携

ア　通級による指導担当教員と在籍学級担任者等間の情報の共有

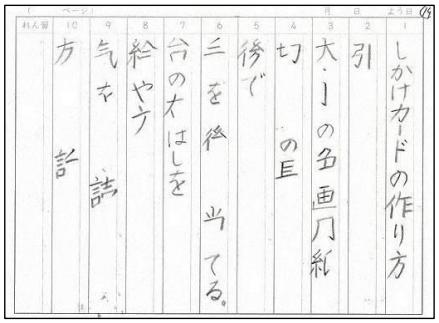
毎時間の様子や本児の感想を書いた連絡ノートを作成し、指導内容の共有ができるようにした。また、毎日取り組む自主学習ノートは、学級担任と内容を検討しながら作成している。取り組んだ内容を学級担任も見て、本児の現状を知ることができるようにした。毎朝、通級指導教室の自主学習ノートの提出ができているかどうかの言葉掛けを行い、継続することの大切さを両者で本児に伝えてきた。

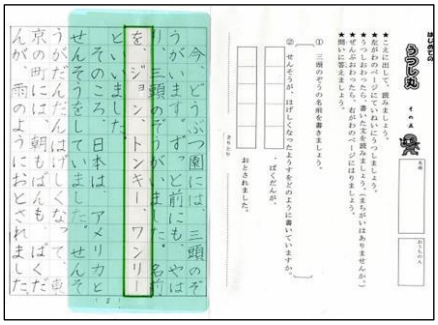
漢字テストの実施日や内容を学級担任と相談し、練習計画を本児と立てることができた。また、午前中に通級指導教室で学習した記憶が鮮明なうちに漢字テストに挑戦できるよう、学級担任と計画した。通級指導教室のプレテストでの結果は在籍学級に持ち帰り、本児の頑張りを学級担任からも称賛してもらった。通級指導教室で利用した学習プリントは在籍学級でも使用し、本児が自信をもって取り組めるようにした。

【自主学習ノート】

イ　在籍学級等での指導の実際

座席を前方に配置し、教師の指示が集中して聞けるようにしている。文字の形がとりにくいため、新出漢字を学習する際には、漢字練習帳やノートに色鉛筆でなぞり線を書き、書くことへの抵抗を軽減してから取り組むようにしている。２学期から学年の取組として週末課題に視写を行うようになった。開始の際には、本児ができるかどうか試行した後、文字数、マス目の大きさを決定した。また、本児が家庭で視写しやすいように、スリット入りシートを渡している。


【なぞり線を入れたノート】


【視写課題プリント（スリット入りシート使用）】

④　評価（成果と課題、改善）

○　カードの操作や書くことを軽減した漢字プリントを活用し、まず漢字の読みや形を覚え、その後書く活動に入ることによって、意欲的に漢字学習に取り組めた。

○　漢字を書く機会が増えたため、「どうだったかな。」と思い出して書こうとする態度が見られ始めた。在籍学級での漢字テストの時間を通級指導のある日の午後に設定したことで、書字の際に気を付けるポイントを忘れないうちにテストに臨み、目標点以上の点数がとれることが多かった。「（自分に合った学習方法で）練習すれば、結果がついてくる。」という気持ちがもて、漢字練習を頑張るようになった。

○　毎日の自主学習ノートに漢字のコーナーを設け、対象児童に負担にならない分量を継続的に学習することで、文字の形やとめ、はねに気を付けて書く習慣ができた。また、マス目からはみ出さずに文字を書けることも多くなった。

○　九九は、自主学習や「ほっとサーキット」により継続して取り組ませることで、定着するようになってきた。

○　今後は、新出漢字を使った例文を聞かせたり、本児に文を作らせたりする機会を設け、既習漢字を使った文を書けるようにしたい。

５　ＡＤＨＤのある児童生徒への指導

（１）障がいの理解と指導内容

ＡＤＨＤとは、年齢あるいは発達に不釣合いな程度において、以下のような状態を継続して示し、それらが社会的な活動や学校生活を営む上で著しい困難を示す状態を指します。

①不注意…　気が散りやすく、注意を集中させ続けることが困難であったり、必要な事柄を忘れやすかったりすること。
②衝動性…　話を最後まで聞いて答えることや順番を守ったりすることが困難であったり、思いつくままに行動して他者の行動を妨げてしまったりすること。
③多動性…　じっとしていることが苦手で、過度に手足を動かしたり、話したりすることから、落ち着いて活動や課題に取り組むことが困難であること。

通級による指導では、これら障がいの状態に応じて一部特別な指導を必要とする程度の児童生徒が対象となります。

■通級による指導での指導内容（例）
〈不注意による間違いを少なくする場合〉
・刺激を調整し、注意力を高める指導
・情報を確認しながら理解することを通して、自分の行動を振り返らせる指導
〈衝動性や多動性を抑える指導〉
・手順の確認をしながら、集中して作業に取り組ませるようにする指導
・作業や学習等の見通しをもたせるなどして集中できるようにする指導
・自己の感情や欲求をコントロールする指導

社会的技能や対人関係に係る困難を改善・克服するための指導として、ソーシャルスキルトレーニングなどがあり、その際には、グループ指導を活用することも有効です。

（２）通級指導教室の環境

児童生徒が落ち着いて、安心して快適に過ごす中で学習に集中できるような環境が必要です。そのために教室内の色調、照明に配慮すること、外部からの話し声や音等の聴覚的な刺激や教室内の掲示物等の視覚的な刺激を抑制することなどが必要です。

また、衝動を抑えきれずに行動したり、他者には気にならないことで興奮してしまったりする場合もありますので、照明器具の防護、飛び出し防止等の対策が必要です。教室内又は近くに、外部からの音や視覚的な刺激が制御でき、かつ安全性を十分考慮した、落ち着きを取り戻す空間が確保されていることが必要です。

注意集中などに関する指導は、個別に行うことが多いと考えられますが、集団の中での好ましい行動を身に付けるための指導などは小集団で指導することが効果的だと考えられますので、個別指導の場とグループ指導の場を確保することが望ましいと考えられます。

通常の学級では、注意の困難に対して、余分な刺激を減らすことができるように黒板の周囲の掲示物を減らしたり、座席の位置を前方にしたりするなどの工夫が必要です。

（３）指導の実際（実践事例）

①　実態把握と目標の設定

◆プロフィール

対象児童生徒	小学校５年生	主たる障がい	ＡＤＨＤ

◆実態把握

実　　態	○　自分の小さな失敗を許せず、大声を出したり、物に当たったりする。 ○　予想外の出来事が起こると感情の起伏が激しくなる。暑さや湿度の関係で、気分が悪いと大声を出したり、机やロッカーを蹴ったりする。落ち着くと反省し、自分の言動を級友がどう感じたかを気にする。 ○　何事にも真面目に取り組み、忘れ物はなく、整頓もできる。自分に腹を立てることは多いが、他児の言動に対して苛立ちを見せることはほとんどない。解決方法や改善策を友達に提案する等、誰かの役に立ちたい思いをもっている。 ○　学習等物事の理解は良好。作文や絵画等、正解が明確・限定されにくい課題には抵抗感があり、時間はかかるが、最終的には仕上げることができる。 ○　知的好奇心は高く、アンガーマネジメント※1についても自ら本を読んで実践しようとする。
本人の思い	いらいらしたときに大きな声で騒がずに落ち着けるようになりたい。
保護者の思い	困ったときの気持ちの表出方法や対応方法を身に付けてほしい。

◆指導目標の設定

通級による指導で指導すべき目標	予想外の出来事が起きた時に、落ち着くための方法を選択することができる。

◆指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
自立活動の内容	・障がいの特性の理解と生活環境の調整	・情緒の安定 ・状況の理解と変化への対応 ・障がいによる困難を改善・克服する意欲	・自己の理解と行動の調整	・感覚や認知の特性への理解と対応 ・周囲の状況把握と状況に応じた行動		・状況に応じたコミュニケーション

◆具体的な指導内容の設定

具体的な指導内容	〈短期指導目標〉 不快な気候や課題に対する苦手な思いなどによって、自分がいらいらしやすいことが分かり、気分転換の方法を取り入れる。 〈具体的な指導内容〉 ○　いらいらが高まる前に対策を講じるとうまくいく体験を増やしていく。暑さや学習内容を考えて、自分から休み時間や授業時間内に保健室で体温を測るなどの気分転換を行う。 ○　アンガーマネジメントについての学習を継続し、自分の言動と比較しながら、より自分に合った対応策を選択・修正していく。

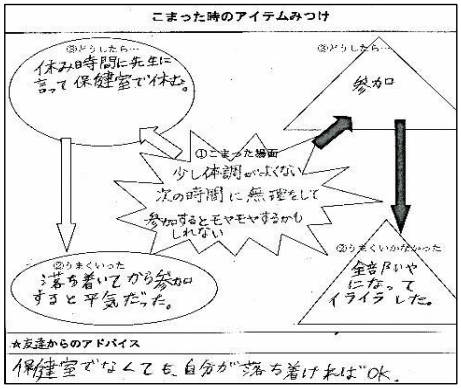
※１　混沌とした気持ちを整理したり、状況を客観的に見たりする力を育てることを通して、衝動性が高まっても自分で沈静化し、適切な表現や問題解決ができるような力を学ぶプログラムのこと。

②　通級による指導での授業実践例

ア　単元名　「解決方法を伝えよう」

イ　目　標　自分の経験を振り返りながら、いらいらが高まる前の対処方法を考えることができる。

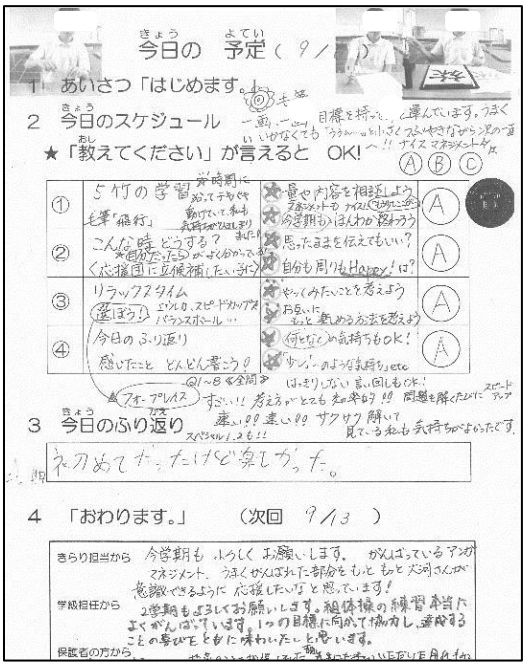
ウ　展　開

学習活動	教師の支援
1　本時のめあてをつかむ。 ・教師と話し合いながら、本時のめあてを確認し、活動計画を立てる。	○　活動への意欲と見通しをもつことができるよう、児童の思いを取り入れながら活動計画を一緒に考える。 ○　表情や言動から児童の心理的な状態を推測し、活動計画を調整する。
いらいらしそうなときに、どうすればいいか考えよう	
2　いらいらしそうなときの対処方法と結果（気持ち）を思い出し、ワークシートにまとめる。  	○　本児のアドバイスで漢字学習が楽しくなった友達のコメントを紹介し、意欲につなげる。 【ポイント①】（学習に必然性をもたせる工夫） 同じ悩みを抱く友達に、うまくいった経験を伝えることで、いらいらが高まる前の対処方法を振り返る必然性を持てるようにする。 ○　いらいらする原因に気付き、事前に自分の行動を予測して対処することの大切さを確認する。 【ポイント②】（理解を深める資料の工夫） うまくできている場面とそうでない場面を対比するワークシートを活用することによって、状況把握をより深める。
3　自分の苦手な硬筆の課題に対する目標値を決め、取り組む。 ・手本通りに書きたい気持ちが強い余りにいらいらしやすい硬筆の課題を最後まで取り組むための「頑張り度数」「作業量」を考える。	○　「80％未満の力で」「頑張り過ぎは要注意」を合言葉に、適切な量や内容を選択できるようにする。
4　トレーニングゲームを行う。 ・「ほどよく頑張り続けるために取り組んでみたい活動」を選択し、取り組む。	○　失敗が明確に分かるトレーニングを選択した場合は、「失敗を一緒に楽しむ」ことを目標とするか確かめる。リラックスに重点を置いたトレーニングを選んだ場合は、理由を確かめ、適切な判断ができたことを称揚する。 【ポイント③】（定着するための工夫） 本時で取り組んだことが、他の場面でも取り入れられるか確かめる。
5　本時の活動を振り返る。 ・自己評価を学習カードに記録する。	【ポイント④】（効果的な評価の在り方） 自己評価と教師の評価を比較することで本児のよさを明確にし、意欲につなげる。

③　在籍学級（学校）等との連携

ア　通級による指導担当教員と在籍学級担任者等間の情報の共有

連絡ファイルを用いて、通級指導教室での様子を文章や写真、学習プリントで伝えると共に、在籍学級や家庭での効果的な支援の方法を伝えた。また、学級担任や保護者からのコメントから課題や頑張りを把握して指導に生かした。本児が、感情のコントロールを身に付けようとしている姿を、学級担任、保護者、通級による指導担当教員の三者で共有し、プラスのメッセージを多く伝えるようにした。本児が適切な対処方法を選択できたことを褒めることで自尊感情が向上し、自信をもって行動することができ始めた。



年度当初から校内の支援体制を生かし、本児の状態に応じて適宜、支援会議を継続して行った。主治医や外部専門機関からの助言をもとに、複数の目で様々な角度から本児の実態を捉えることで、学校現場からは見えていなかった背景に気づき、支援の方向性がより明確になってきた。「個別の指導計画」も、実態の変化や影響する環境要因に応じて、目標や手立てを変更するなどの修正をした。この計画をもとに指導を行い、学期末の評価から次学期の目標設定を検討した。

イ　在籍学級等での指導の実際

「チームで支える」を合言葉に、学級担任一人が対応することのないように役割分担を行った。環境調整や事前の活動内容説明を行っても、感情のコントロールが難しく、学級での学習参加が難しい状態になった場合の対応場所や対応者を決めて対応した。また、事前に気持ちを落ち着ける場所として本人が選択した場合の保健室での対応方法等、校内体制としての支援が協力的に行われた。対応者が、通級指導教室での学習を一緒に振り返り「頑張り過ぎは禁物。80％の力だったよね。」と声を掛けると、ほっとして気持ちの切り替えができることも見られだした。

さらに、学級担任が本児の思いを受け止めるための「交換ノート」を用いたり、相談時間を設けたりすることで、「いらいらしてしまう自分も含めて大切にされている」ことを実感できるようにした。学級集団の中で落ち着いて取り組む姿も、保健室で気持ちを落ち着けてから個別に課題を仕上げる姿も、どちらも学級担任が称揚し続けることで、感情の抑制が効きにくくなる前に、適切な対処方法を選択することができるようになってきた。

④　評価（成果と課題、改善）

〈指導の成果〉

校内体制を生かし、連携して取り組むことで、支援をより効果的に行うことができた。行動を客観的に振り返り、いらいらする原因に気付く学習により、本児から、自分の状態について的確に把握していると思われる言葉が聞かれ始め、状況に合わせて事前に対応を考え、行動を選択できることが増えてきている。次第に、本児の言動は落ち着き、大きな声で騒いだり、物に当たったりすることは少なくなっている。

〈課題及び改善点〉

いらいらする頻度や怒りの度合いは減ってきているものの、中学校進学に向けて環境の変化に対する不安は高まっている。今後、医療機関や中学校との連携を図りながら支援方法の検討を積み重ねていく。

６　その他障がいのある児童生徒への指導

（１）情緒障がいのある児童生徒への指導

通級による指導では、主として心理的な要因による選択制かん黙等がある状態で、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする児童生徒が対象となります。

選択性かん黙等のある児童生徒については、情緒障がいの状態になった時期や、その要因などに応じて中心となる指導内容が異なります。例えば、カウンセリングを中心とする時期、緊張を和らげるための指導を行う時期、学習空白による遅れなどを補いながら心理的な不安定さに応じた指導を行って自信を回復する時期と、これらの段階に応じて障がいの要因を踏まえた指導内容を適切に組み合わせて指導することが重要です。

選択性かん黙等のある児童生徒は、校内でリラックスできる場が必要で、人の出入りを感じさせない環境構成が重要です。また、各教科の内容を取り扱いながらの指導や心理的な安定を図るカウンセリング的な指導を行う場所は、入口から見えにくい場所が望ましいと言えます。

（２）弱視のある児童生徒への指導

通級による指導では、拡大鏡等の使用によっても通常の文字、図形等の視覚による認識が困難な状態で、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別な指導を必要とする児童生徒が対象となります。

主として視覚認知、目と手の協応、視覚補助具の活用等の指導が中心となりますが、形の似た漢字の読み書きの指導、数学のグラフの目盛りを正確に読み取る指導や社会科の複雑な地図を読み解く指導など、視覚的な情報収集や処理の方法を指導しなければ効果的に学習活動を行うことができない内容などについては、各教科の内容を取扱いながら指導を行うことも必要となります。

教室の全体照明（300～700 ルクスの照度）や机上照明を整えて、児童生徒一人一人に合った照度を調整することが必要です。その際、明るすぎるとかえって見えにくくなる眼疾患もあるので、直射日光を避けたり、窓等横からの光を調整したりするためのカーテン等を設置する必要があります。

（３）肢体不自由のある児童生徒への指導

通常の学級での学習におおむね参加でき、留意して指導することが適切と考えられる軽度な障がいのある程度で、運動・動作の状態や感覚・認知機能の改善・向上を図るための特別な指導が一部必要な児童生徒を指します。

指導内に当たっては、コンピュータ情報通信ネットワークなどの情報手段、視聴覚機材や教育機器などを積極的に活用するとともに、これらの各種の機器等を学習に活用できるようにする指導なども考えられます。

（４）病弱及び身体虚弱のある児童生徒への指導

病弱及び身体虚弱の場合、通常の学級での学習におおむね参加でき、一部特別の指導を必要とする児童生徒が、通級による指導の対象となります。

指導内容としては、健康状態の回復・改善や体力の向上を図るための指導が中心となります。疾病や事故等により「高次脳機能障害」になった児童生徒の中には、日常生活や社会生活への適応が難しい症状が出ることがあります。感情のコントロールができず、対人関係が難しくなった児童生徒は、自立活動の「人間関係の形成」の「他者の意図や感情の理解に関すること」「事故の理解と行動の調節に関すること」などを中心に指導を行うことが考えられます。

肢体不自由、病弱及び身体虚弱の場合は、他の障がいと異なり、必ずしも通級による指導が一般的ではないことから、その必要性について慎重な判断の下に行う必要があると考えられます。